

# THE QUARTERLY REPORT

## 立教大學經濟學公報

VOL. III. No. 4

1933

### 工部省管轄の官營事業に 關する斷片的考察

——「工部省沿革史」を中心として——

經 三 諸 井 忠 一

明治十三年以後の官營工場拂下げは、無償でなく、無償と同様に拂下げるには如何にすべきかの問題であるかの如く、「工場拂下規則」(明治十三年)もものは「適宜に」處分された。

この過程に於て絶対主義は、拂下げの対象として、外國人民と我人民の區別をよくわきまへてゐた許りでなく「人民」を更に「相當ノ貸渡拂下人」と、例へば「園村人民ノ不利ニシテ數百ノ坑夫窮困スルニ至ルベキ」「工部省沿革史」——「明治前期財政經濟史料集成」第十七卷一四八頁(以下引用の頁は同書による)と言ふもつともな理由で、請願して、小坂鑛山の拂下げを拒絶された附近村民二百九十五名の如き輩を區別することを理解してゐたことをとつきり示した。そして更に、例へばこ

の「相當ノ貸渡拂下人」の選定が、拂下價格に有るのでなくして、特權的な結び付きが問題であつたことを三池炭坑の拂下げは我々に教へる。

それは淺野總一郎の二百萬圓即金拂の提議に對して、三井家が三百六十萬圓の高値——だが八十萬圓即金、殘

金廿九年賦をもつて勝利者となつた。

だが工務省のこの最後のけたはずれの算盤は、工部省の「經營」が如何なるものであつたかの總決算、重商主義的情熱に満ち満ちてはゐたが、正常な形に於ける資本としての資本では有り得なかつたことの論理的延長である。

明治廿一年に於てさへ、農商務省雇ドクトル・ワグネルに指摘された「極メテ見易キ事柄、例へば、資本金ノ利息、建物機械ノ償還金、不時積金等ノ事柄ニ就テハ之ヲ外國人ヨリ考フレバ充分ニ知ラザルガ如キノ感ナキ

能ハズ……」(一)と言つた點が、此處では全く誰に遠慮することなく「作業條例」(明治十年)に依つて法文化されてゐる。即ちその年の「收入」(例へば鑛山課に於ては、各產出金銀銅鐵石炭石油の販賣代金プラス官有物拂下代及貸下料その他)は、その年の營業費と決算して、餘分があれば「益金」として國庫へ納附される。ところでその年内に固定資本(大体「興業費」なる範疇に含められてゐる)を新に追加しやうと、その磨滅を補填をしやうと、或は流通資本(大体「營業費

」なる範疇に含められてゐる)の不足を補はうと、それ等は「欠額補填」として別勘定であり、「益金」はあくまで益金として納入され、一般歳入中に勸業收入として一定の比率を——しかも上向してゆく比率を示してゐるのだ。

## 目 次

### 論 說

工部省管轄の經營事業に  
關する斷片的考察……(經三)…諸井 忠一

恐慌下にある

我國地方金融機關……(經三)…川妻 干城

征韓論に就て……(經三)…室橋 博

我國に於ける農民運動を見よ……(經三)…坂井 知彦

實演販賣賣上仕入に就て……(經一)…秋山 正明

### 會 報

編輯後記……

勿論どんなへまな支配人にしても、若し固定資本の償却基金を差引くことなく、しかも直接固定資本の消失を意味する「拂下」と「貸下」までも収入として計算され得るのならば、更に固定資本や流通資本の補充が収入と關係なしに可能であるならば、彼は「収益」をあげることが出来るであらう。

かくて「最後の日」に一切が明瞭になるまでは「營業費」が年々決済されるほか「収益」は歳入の部に「工業費」と「欠額補填」は歳出の部にそれぞれ氣儘な生活を續けてゐたのだ。

この資本としての一資本の觀點からは、アブノーマルな、とにかくにも「營業」によつて得た「収入」を、後には國庫の負擔となるにしても、勸業収入として持ち去らうとする性急さ、「スク準備金ヲ支消スルニ付、一時其ノ金額ノ減少スベキモ、數年ヲ待タズシテ再ビ利殖シテ歸來スルガ故ニ一舉ニシテ物産工作ノ振起ト準備金利殖トノ兩目的ヲ達シ得ルノ計算」(2)によつて始められたこの官營事業に對する、その半殖民地的境遇に強制された、結果に對する性急さが、官營事業を拂下げにまで導いた。この性急さの故に、例へば兵庫造船局に對して「會計上困難多キタメ機械器具尙充備セザルアリテ、完全ノ製造所ト言フベカラズ」(三五頁)と言はしめた如く、正常な利潤をあげるべく、高度な官營事業の性質自身が要求する資本が充足されなかつたのだ。(そのためにきまり文句の様に、屢々、各分局よりの新なる設備に要する資本が要求されてゐるのを見る)

人々は屢々、維新政府の初期に於ける保護政策の大掛りのことを指摘する。

勿論それは、拂下に際して、財政的なからくりによる民衆からの大掛りな収奪をもつて、産業資本の發展のために大きな「犠牲」を拂つた。だが過程的には、フランスやイギリスの絶對主義の大まかな重商主義的配慮に比して、如何に底の見へた財布をはたいてのこせこせした損徳計算であつたことか！

人々はまた、それを直譯的な失敗の歴史として、十七八年以後の「現實的な政策」と機械的な對象を試みる。

だがインフレーションによる經濟的困亂の克服と兌換制度の統一への、絶對主義の努力の集中による財政的見地からなされた工場拂下げは「當初設立ノ旨趣ヲ失ハズシテ其工事ヲ繼續セシムルノ意ヲ以テ」(明治十五年工作局ヨリ太政官へ稟請)爲されたし、如何に無償であるとは言へ、後に述べる如く、「相當ノ貸渡拂下人」の成長が見逃されてはならぬ。

問題は工部省を中心とする一切の重商主義的政策の質的轉換にあるのではなくして、其處に萌芽的に混在せる軍事的なモメントと産業資本的なモメントの、紙幣整理

を契機とせるより擴大せる規模に於ける發展、それぞれの純化として理解せらるべきだ。

官業拂下の直接的な契機であつと財政的考慮以外に、我々は今一つのモメントを注意すべきだ。即ち官營事業の中に胚胎せる産業資本特有の無政府的な性質と、一方、民間産業資本の打ち勝ち難き成長、相對的な條件付きの意味に於てははあるが、その獨自的な發展との間にもかもし出される矛盾、これである。

例へば筑豊炭田日常盤炭田地方に根を降した民業は、前者は「筑豊石炭鑛業組合」にまで結成され、後者は(盤城炭鑛會社)の成立にまで發展して行つた。この民業の成長は、(當地產炭ハ専ラコレヲ海外ニ輸出シ、内地人ハソノ効用ヲ知ラズ故ニ鐵道工作等ノ官局ハ勿論官省諸工場ヲ使用セバソノ價值民炭ヲ購フヨリ廉ニシテ人民モ又該炭ノ効用ヲ知得シ遂ニ内地ノ需要ヲ増スニ至ラン)(一一二頁)と言ふ明治十六年の三池分局の上請の如き純經營的考慮を否定して、十八年八月に至つては、一書記の三池鑛山採炭を三十萬噸に至らしむべき技術的提議が「官業ヲ増殖スレバ民業自ラ減耗スルヲ以テ」と言ふ商議の結果(一一六頁)十八萬噸にまで官採量を減じることが決議せしめるにまで至らしめたのだ。しかもかくの如き抑制にも拘らず、例へば同じ三池分局に於て、明治十九年十二月五萬圓増額ノ理由として「產炭ヲ從來ソノ需要者ト豫約シ、採炭スルニ隨ツテ直ニ取需セリ、而モ近來豫約者大イニ減ジ大クハ時價ヲ以テ販賣セルヲ以テ或ハ數ヶ月間貯藏セザルヲ得ズ、故ニ營業資本ニ響影シ欠乏ヲ告グルヲ以テ」(一一二頁)と述べられてゐる如く、資本主義生産の法則に強制されて盲目の市場へはいつて行かねばならなかつたことによつて、民業にとつてその官業の存在自身が桎梏となつてゐたのだ。「畢竟營利ト官業ノ並行モザルハ道理ノ山テ然ラシムル所ナリ」と言ふ工作局の言葉は、かくの如き觀點からはつきり理解することが出来る。

だが絶對主義が産業資本へ拂下げたものは、無償の財産のみではなく、もつと高價な精神的な贈り物をするにとを彼は忘れはしなかつた。

農業革命の歴殺による半封建的小作關係の維持と、それによつて規定される殖民地的な賃銀の創設を以つて、一般に、資本主義的搾取の算盤を可能ならしめた絶對主義は、又自ら官營事業に於て立派な「資本主義的搾取」の模範を示したのだ。官營鑛山の内後藤象次郎に拂下げられ、その後藤の借金の償却のために三菱の買受けた高島鑛山に於ける、あの惡評高き大事件を引き起した「千古未曾有の壓制法」は、その確實な模寫であるに過ぎないこの精神的な「拂下物」を考察してこの雜文を終ることにしよう。



官營事業中、殊に諸鑛山に於てはその後大規模に繰り展げられた、今に至つても我々の眼前に見る調和の欠けた風景が、壓縮されてくつきりと浮び出てゐる。

我々はこれ等の「營業」の過程に於て、二三の地方に於ける小暴動（生野佐渡三池）と分局警備の名の下に總ての鑛山へ官吏の行くところは何處へでも、混棒持った使用人か、支配的には本來の警察の形をもつてか、警察權が影の如くつきまとつてゐるのに遭遇する。生野佐渡に於ける小暴動は、「鑛業上ノ弊習ヲ改革セルヲ以テ」生じた「失業ノ人民」の飢餓に對する反抗であつた。これ等は多少の動搖の内に、救助米（生野では一人一日米三合）と混棒の出動を持つて鎮壓されたが、この、官營以前の經營に比しての資本の高度化は、機械によつて驅逐された失業人民に、機械を運轉する教育ある官吏か、外國人が代置される状態に於ては、農民の苦力化に對してのみ作用したことは言ふまでもない。生野鑛山の土民等の願書に「本地ハ僻隅不毛ニシテ他業ナシ、時方ニ米價ノ騰貴スルニ會シ、困窮切迫秋季ヲ待ツ能ハズ」（一〇二頁）とある如く、かくの如き場合には、農民の本業に近い副業を奪ふことによつて、直接の追放でさへあつたりだ。

この農民の苦力化は、三池鑛山に於てなされた如き囚人労働の編成に露骨な發現を見た。「從來ノ經驗ヲ顧ミルニ、傍近農民ハ農事ノ間隙ヲ以テスルヲ以テ専ラ之ヲ使役スルヲ得ズ、近年來、近縣ノ囚徒ヲ役スルニ彼此収益ヲ得、此ヲ以テ近傍ニ一ツノ集治監ヲ建設（費金六萬圓）シ中國四國各縣ノ囚徒二千人許リヲ（！）驅ノテコレヲ使役セバソノ益大ナル」（一一一頁）と言ふ理由で明治八年三瀨縣の囚人を始めとして、福岡熊本長崎佐賀諸縣の囚人が「募集」された。

「工部省沿革」を一貫する冷靜な、寧ろ冷酷とも言ふべき筆調をもつて書かれてゐるが、明治十六年九月、熊本縣囚によつて爲された放火暴行——鑛山を救ふために「常民坑夫」廿二名「囚徒」廿四名及馬十三頭を、坑内に於て、窒息せしめることによつて終りを告げたこの小暴動、十七年三月の七浦坑内に於ける暴行、器物破棄、（記事には成つてゐないが常民坑夫を使用してゐた總ての諸鑛山に於て、常に小競合は演じられてゐたであらう）殊に、憎まれ

ものであつたに違ひない警衛巡查及坑内取締下掛を廢して、遂に日給五十錢以下の「制服、支用品ヲ給與セル」四十名の巡視を以つて變へしめた前者の暴動は「ソノ益大ナル」囚人使役が如何なるものであつたかを物語る。

かしこでは三井等の特權的商業資本が、その産出石炭を清國市場へ持ち出して、補助さへ受けて一儲けやつてゐる。此處では「常民坑夫」が囚人と立ち交ちつて、その苦力化に迫車をかけられ、囚人は搾取に耐へかねて暴動にまで陥り立てられてゐる。

だが更に我々は、拂下げに當つてあんなにも氣前のよかつたこの「旦那」が一方に於て、けち臭い小商人的な算盤を労働者に對して弾いてゐたことが指摘されなかつたら、調和の欠けた風景の輪廓を完全に描寫したとは言へないだらう。

例へば小坂鑛山の十輪田支山に於ては「僻地ニシテ坑夫等、日常野菜其他ノ食品ハ行商ヲ俟テ之ヲ購賣スルニソノ價值高價ニシテ坑夫等ノ窘窮ヲ増シ爲ニ事業ニ影響ヲ及ボスヲ以テ、該山ノ林地ヲ借受シ坑夫ノ家族ヲシテ菜蔬ヲ栽培セシメ而シテ若干ノ借地料ヲ」（一四七頁）納めしめ、又三池鑛山に於ては、囚人労働に對して——十一年六月長崎縣徴役囚のため、小舎を建築した費用九百圓（！）を「上納スル所ノ工錢ヲ以テ月賦償却セシム」（一〇九頁）と言つた立派なやり方がそれである。

この安い賃銀によつて生活することを、労働者自身が工面すると言ふ美はしい精神や、強制的に募集された囚人が、國費ではなくして自分で住家をこしらへると言ふ不思議なロジックは——その後産業資本がもつと巧妙に寄宿舎や食堂やその他等々實踐することによつて立派に繼承された。

この僻地の坑山に我々の見る商業資本の保護、常民坑夫の苦力化の象徴としての囚人労働、囚人小屋の月賦拂は、日本に於ける絶對主義の「開明的な心」の、人目を憚らない原始的な姿でもあるのだ。

限られた紙數に於ける私の斷片的考察は此處で止めなくてはならぬ。（以上）

註（一）明治廿五年京都ノ關西聯合共進會ニ於ケル演説——「工業ノ方針」五五頁

（二）「紙幣整理始末」（松方正義）——「明治前期財政經濟史料集成」第十一卷、——七頁以下

## 恐慌下にある 我國地方金融機關

經三 川 妻 干 城

恐慌の激化によつて、破局的經濟下に束縛された我が國農村に於て地方金融關は如何なる状態におかれてゐるか。

恐慌に依る担保物件の値下り焦付等は必要的に地方銀行の不動産金融問題を前面に暴露した。

即ち普通銀行担保貸付金は、大正元年末には十四億五千萬圓であつたのが次第に増加し昭和五年末には五十九億圓以上に上つた。その内土地建物の担保貸付金は全體の二割三分約十五億と見ることが出来る。しかもこの不動